

八月踊りの継承実態と地域的役割
～鹿児島県奄美市笠利町佐仁集落を事例に～
小林暖加（お茶の水女子大学大学院）

研究背景・目的

日本各地の民俗芸能は、長年にわたり地域社会の文化的基盤を形成してきたが、近年その継承は大きな困難に直面している。とりわけ過疎化や少子高齢化により担い手の確保が難しく、地域行事や伝統芸能の継続が危機に瀕している点は深刻である。さらに新型コロナウイルス感染症の流行は芸能継承に追い打ちをかけ、令和2年度には重要無形民俗文化財の行事等のうち58%が中止、33%が縮小・変更、9%のみが例年通り開催された。また令和2・3年度の地域文化遺産行事も約7割が中止または変更となり、口伝や実演を通じて継承されてきた技能や作法の継続が困難となった（文化庁, 2023）。このように、長年培われてきた「わざ」と人々の思いが途絶する可能性は、民俗芸能研究における大きな課題である。

伝統芸能の継承には、普及活動や外部担い手の確保（池水・前田・岩下, 2017）、伝統の柔軟な変容の受容（星野, 2012）、観光資源化や協賛拡大（文化庁, 2024）など多様な実践が報告されている。しかし、地域ごとに社会的条件や文化的背景は異なるため、画一的な方法ではなく、それぞれの地域や芸能の特性に即した継承方策を検討する必要がある。そのため、個別地域における具体的な継承活動を明らかにすることが求められる。

本研究が対象とする鹿児島県奄美市笠利町佐仁集落の「八月踊り」は、旧暦八月のアラセツおよびシバサシを中心に、太鼓の伴奏に合わせて歌を掛け合いながら円形に踊る芸能である（中原, 1992）。佐仁集落では踊り好きの風習が今なお残り、少子高齢化が進行する中でも住民の「後世に伝えたい」という思いを背景に、2021年度から継承活動が本格化している。既存研究（内田, 1983；松原, 1981；中原, 1997）は踊りや歌詞の記録、担い手の語りの分析を中心に展開されてきたが、2021年以降の継承活動や世代交代の中で八月踊りが地域住民に与える影響については十分に検討されていない。

以上を踏まえ、本研究は佐仁集落における八月踊りを対象に、継承活動の実態・課題を明らかにし、その社会的役割を検討するとともに、持続可能な継承方法について考察することを目的とする。

研究方法

① 文献調査

八月踊りの実施形態について記録した先行研究や伝統芸能における継承活動に関する先行研

究を参考にする。

② 継承活動の観察記録

2023年(5月・8月・10月)2024年(9月)2025年(8月・9月)の計6回、佐仁集落に訪問し、佐仁公民館で実施される継承活動の様子と八月踊り本番の様子を映像として記録する。さらに、継承活動の場において参加者のグループに加わり、参与観察と並行して、八月踊りに関する発話内容を記録する。

③ インタビュー調査

佐仁集落の八月踊りの継承活動に携わる4名に半構造化インタビューを行う。

研究結果

(1) 八月踊りが果たす社会的役割

佐仁集落における八月踊りは、単なる民俗芸能にとどまらず、地域社会を統合する象徴的存在であることが、インタビュー調査から明らかになった。担い手の一人Tは「一番じゃない？これが中心じゃない？佐仁は八月踊りでまとまっていると思う」と語っており、この証言は八月踊りが地域の中心的な価値を担っていることを示唆している。また、他の住民からも「佐仁イコール八月踊り」という言葉が繰り返し聞かれ、幅広い年齢層において八月踊りが集落の結束を支える中核的役割を果たしていることが確認された。

(2) 継承活動の実態と課題

現在、八月踊りの継承活動は第1・第3土曜日に公民館で行われており、そこでは熟練者のもとで本番同様の歌と踊りが実践的に繰り返し行われている。この場は、身体を通じた即興性や歌掛けの感覚を含めて直接伝承する機会として機能している。一方で、第2土曜日には若手のみでの練習が行われている。ここでは、指導者が不在のため、CDや歌詞集に頼らざるを得ない状況にある。その結果、歌詞の誤記や録音上の癖をそのまま学んでしまうなど、従来の口伝とは異なる学び方が広がりつつあり、熟練世代との間に歌い回しや表現の感覚のずれが生じている。こうしたずれは、八月踊りの即興性や共同性を弱める懸念がある。

以上から、公民館での実践的な伝承と若手による自主的な学習は両輪となって継承を支えているが、その間に生じる世代間の方法や感覚の違いをいかに調整し、持続可能な仕組みへと結びつけるかが、今後の重要な課題として示唆された。

主な引用参考文献

・文化庁(2023)文化芸術推進基本計画(第2期)ー価値創造と社会・経済の活性化ー
https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunka_gyosei/hoshin/pdf/93856401_01.pdf (参照日 2025年8月15日)・池水聖子・前田晶子・岩水雅子(2020)青少年がつくる「ふるさとのまつり」伝統芸能継承活動と地域文化創造ー地域に暮らす子ども・若者組織の「学びのプロセス」ーマツダ財団助成研究報告書、青少年健全育成関係32巻9-17・中原ゆかり(1997)奄美の「シマの歌」東京：株式会社弘文堂pp.1-254.